

主 題：ユダの勧め

聖書箇所：ユダの手紙 17-23節

ユダの手紙17節をごらんください。

サタンの反逆から始まった神への抵抗は最後のさばきの時までやむことはありません。神の真理を惑わす働きはサタンの手下たちによって人類の歴史の初めからなされてきました。エデンの園において、本当に神はそう言われたのですかと、サタンは神に対する疑いを抱くように誘惑しました。そのサタンの働きは初代教会においてもなされていました。パウロと同じように自分たちも神の使徒であると主張しながらコリントの教会の中に入り込んできた偽りの教師たちに対して、パウロは「こういう者たちは、にせ使徒であり、人を欺く働き人であって、キリストの使徒に変装しているのです。」(2コリント11:13)と大変厳しいことを言っています。しかもこう続きます。「しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです。ですから、サタンの手下どもが義のしもべに変装したとしても、格別なことはありません。」と。2コリント11:13-15でパウロは、教会の中に入り込んできた自分たちは使徒であると自称する連中に対して、彼らはサタンの手下どもであると大変厳しいことを語っていました。

また、ペテロも2ペテロ2:1で「イスラエルの中には、にせ預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも、にせ教師が現われるようになります。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえて、自分たちの身にすみやかな滅びを招いています。」と、同じように、にせ教師たちが入り込んで来て、真理を曲げて、人々が惑うように、人々が混乱するようにと働きをなすのだと警告をしていました。今も変わらずその働きはなされています。

イエス様もそういったことをご存じでした。ですから、イエス様はこんな話をなさいました。ある人が良い種を蒔き時に、彼の敵がやって来て毒麦を蒔いていったという話がマタイ13:24に出てきます。敵は必ず良い種が蒔かれたところに出てきて毒麦を蒔くと。神の真理を語る時に、その真理を曲げようとする働きが必ず出てくると。人々を正しくない方向に導いて行こうとする働きは必ずなされるのだとイエス様ご自身も警告されています。

私たちがこのユダの手紙を学んでいるのは、ユダがこの手紙を書いた理由と同じです。3節でユダが「愛する人々。私はあなたがたに、私たちがともに受けている救いについて手紙を書こうとして、あらゆる努力をしていました」と言ったように、ユダの当初の願いは、この愛する者たちに救いについてのメッセージを記すことでした。ところが「聖徒にひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに勧める手紙を書く必要が生じ」と、ユダはあることに気づくのです。それは教会の中に偽りの教師たちが入り込んで来て惑わしているという教会の現状を見た時に、救いよりもこのメッセージを記さなければいけないと。そこでユダはこの読者たちに、信仰のための戦いに励むことを勧める目的でこの手紙を記したのです。

ということは間違った教えに惑わされないようにと願ってユダはこの手紙を記しているのです。それは私たちにも必要です。時代が違うとか、場所が違う話をしているのではなく、今の私たちのこの国において、私たちのこの教会において、間違った教えが入り込んで来ているのです。そういった間違った教えに対してどのように自分たちを守っていくのか、そのことをユダが教えようとしたのです。私たちに必要なことはこのメッセージにしっかりと耳を傾けることです。それはあなた自身があなた自身を守り、しっかりと真理に立ち続けていくためにです。

☆ 偽りの教えから自分を守る術

A. 神の真理に立つ

17節「愛する人々よ。私たちの主イエス・キリストの使徒たちが、前もって語ったことばを思い起こしてください。」とあります。残念ながらきょう私たちは後半の20節からを見ることはできないのですが、まず最初にユダは、あなた自身が偽りの教えから自分を守るための秘訣は神の真理、みことばに立ち続けていくことだと教えています。この17節の中で注意していただきたいのは最後に出てくる「思い起こしてください」という動詞です。これは日本語の聖書を見ると、ユダ自身の願いに見えます。ユダが読者たちに対して「思い起こしてください」とお願いしているかのようです。でも実はこれはお願いではなくて命令なのです。なぜこれを命令したかということ、これこそが偽りの教えから自分自身を守っていく術だからです。偽りの教えに勝利する秘訣だからです。では一体何を思い起こすことが重要だとこの箇所は私たちに教えてくれるのでしょうか。「私たちの主イエス・キリストの使徒たちが、前もって語ったことばを」と書いてあります。その内容も彼が教えてくれていますから、今から見ていきますけれども、その前に幾つかのことを注意しておきましょう。

① 使徒

まず「使徒」ということばの一般的な意味は、メッセージを携えられて遣わされた人、メッセンジャーです。またある人の代理とか代表として特別な任務に遣わされた者たちを指します。この箇所が我々に言っているのは、ただの「使徒」ではない。この人たちは「主イエス・キリストの使徒」であると書いてあります。つまり主イエス・キリストによって彼らが送り出されたのです。主イエス・キリストのメッセンジャーとして、主イエス・キリストの代理として彼らは派遣されたのだと教えます。もちろんこの「使徒」は十二使徒プラスパウロのことです。

② 前もって

ユダはこの人たちが「前もって語ったことばを思い起こ」すようにと命じています。この「前もって」と書かれているのは、実は使徒たちが語った時には、まだユダたちが経験している偽りの教師たちがいなかったからです。こういうことが起こるのだということを、それが起こる前に語っていたと言うのです。

③ 私たちの主イエス・キリスト

また、使徒たちは「主イエス・キリストの使徒」であると同時に、「私たちの主イエス・キリスト」と書いてあります。ということは使徒たちだけではなくて、我々信仰者も例外なく主イエス・キリストと特別な関係に入れられていることを言っているのです。我々クリスチャンはみんな主イエス・キリストと特別な関係にあり、イエス様は私たちの神であり、我々の救い主であり、我々の主です。この方は私たちのことを神の子どもと呼んでくださった。特別な関係の中に私たちは入れられたのです。ですから、ユダは、我々信仰者も特別な関係に入れられているけれども、その中でもこの使徒たちは特別な使命を受けて送られたと教えています。でもよく考えてみると、この「使徒」というのは現在存在していません。「使徒」になるための条件は、もちろん神から召されるのですが、彼らは実際に自分の目でイエス・キリストの復活の証人でなければならなかった。今、世界じゅうどこを探してもそんな人はいるわけありません。ですから現在「使徒」は存在していません。ただ神があなたや私を救ってくださり、あなたや私をこの世に遣わしてくださっている、その点は共通しています。神は特別な計画を持ってこの世にあなたを遣わしてくださっている。あなたの遣わされているところ、職場かもしれないし、学校かもしれないし、家庭かもしれない。どこであったとしても神はあなたをそこに遣わしてくださっている。なぜなら私たちはこの主によって贖われ、主と特別な関係に入れられたからです。

1. 前もって語られたこと

さて、主の遣わされた「使徒たち」が前もって何を語ったのか、その内容が18節に出てきます。「彼らはあなたがたにこう言いました。『終わりの時には、自分の不敬虔な欲望のままにふるまう、あざける者どもが現われる。』」と。つまり使徒たちが前もって語ったメッセージというのは「あざける者どもが現われる」のだという警告のメッセージでした。将来あざける者たちが必ず出現するという警告のメッセージを使徒たちは語ったのです。「終わりの時には」とあります。「終わりの時」というのは今の教会の時代が終わる時です。主イエス・キリストが再臨される時です。その日が近づくにつれてあざける者たちが現れるのだという警告が発せられ、そして確かにその警告は成就しました。あざける者たちがたくさん出現してきたのです。

1) あざける者たち

この「あざける者」たちということばは、新約聖書に2回しか出てきません。この箇所と2ペテロ3:3です。そこには「まず第一に、次のことを知っておきなさい。終わりの日に、あざける者どもがやって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、」と。最初に私たちがこのユダを学び始めた時に2ペテロと非常に関連しているという話をしました。私たちは2ペテロで、あざける者たちが出てくるというメッセージを見ました。ユダの手紙はペテロが2ペテロを記した後に書かれています。そしてユダは、もう既に私たちの群れの中にあざける者たちがいて、ペテロが預言したことが実際に起こっていると言うのです。確かにみことばで警告されていたことが現実の問題となって、ユダの手紙の読者たちの教会の中に偽りの教師たち、あざける者たちがもう既に存在していたのです。

◎ 警告：信仰の注意喚起

なぜペテロがこんな警告を与えたのか、なぜあざける者やにせ教師たちが入り込んでくることへの警告が大切なのかという、その警告を聞くことによって私たちは、そういう人がやって来るから惑わされないように注意を払い、備えをなします。特に最近我々は地震を多く経験します。そうすると地震が来るという警告を聞いて、それを信じている多くの皆さんは間違いなく保存食を蓄えたり、耐震工事をしたり、そのための備えをします。こういった偽りの教師たちが入り込んできて偽りの教えをもたらすという警告を聞いている者たちは、では自分たちが惑わされないように、しっかり準備しようと備えをする。そのためにこういう警告は非常に重要です。まさに信仰の注意喚起です。

内容を見る前にもう一つ見ていただきたいのは、18節に「彼らはあなたがたにこう言いました。」とおもしろい書き方をされています。「彼ら」というのは使徒たちのことです。もし、読者たちが使徒たちが書いた何かを読んでということであれば、ユダは、彼らがあなたの方に対して書いたものを読んでという表現を使いますが、そういう使い方をしていません。ここには「彼らはあなたがたにこう言」ったとあります。つまりこの読者たちは使徒たちから直接的に警告のメッセージを聞いているのです。彼らはこの教えを個人的に受けていたのです。ですからユダはあなたたちが彼らから直接的に聞いたその教えをもう一度思い出してみなさいと命じるのです。あざける者どもがやって来るから、その人たちに対してどう振舞えばいいのか、その教えをもう一度思い出すようにと。

(1) 真理に従わない者

この「あざける者ども」というのはどんな人々なのか——。この「あざける」ということばは、あざけることによって笑い者にするということです。もっといえば、見下げて悪口を言ったり、ばかにして笑うことです。「あざける者ども」は一体何をばかにして笑っていたのか、見下げて悪口を言っていたのかというと、彼らは神の真理をあざけていたのです。なぜそれがわかるのかというと、18節「終わりの時には、自分の不敬虔な欲望のままにふるまう、あざける者」たちとあります。この人たちは神の真理を聞いても決してその真理に従おうとはしないのです。その真理を聞いてもそれはばかげたことであると彼らは信じ切っていて、神の真理に心を開こうとしない。主の教えを否定し、主の教えに反することを信じてそれを教えるだけではなくて、主の教えに反する生き方を習慣的に継続して行いながら、人々を惑わそうとするのです。18節でユダは、この「あざける者」たちに関して説明を加えているのですが、まさにこの人たちは決して神の真理を心から受け入れて従っていかうとはしない人々のことです。神様のメッセージに対してそれをばかげたことであると見下げて笑いものにしていると。

(2) 自分の欲望に従う者

また同時に彼らは神の真理に従わないだけではなく、自分の欲望に従って生きている者たちです。「不敬虔な欲望のままにふるまう」と書いてあります。この「不敬虔」ということばは神を敬わないという意味もあるのですが、不信心、信じない心です。「欲望」ということばは、新約聖書の中に38回出てきています。何かを行うとか、何かを手に入れようという強い願望を意味します。どうしても何かを行いたいとか、どうしても何かを手に入れたいとする強い願望です。また道徳的に正しくない行動を行うことや人に属するものを得たいとする強い願望、これがこのことばの意味です。最後の人に属するものを得たいとする強い願望というのは人の物を欲しがることです。なぜこの人が持っていて私は持っていないのか、そしてその持ち物を欲しがる欲望、これが神のみこころに反することはおわかりだと思います。あの十戒の中の一つの教えを思い出してください。十戒というのは守ることによって誰かが救われるのではなくて、神の基準が示されたものです。つまりいかに私たちは神の基準から外れているかということを一ひとりひとりに悟らせるためです。その十戒の中にこういう戒めがありました。出エジプト20：17「あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。』と。

ですから教会の中に入り込んできた偽りの教師たちは真理に真っ向から背いているだけではない。彼らは自分たちの欲しい物を何とか手に入れようという願いを持って生きている人たちなのです。彼らの考えていることは神を満足させること、神を喜ばせることではなく、どうしたら自分を満足させ、どうしたら自分を喜ばせるか、そのことだけなのです。

彼らはなぜこんな生き方をするのかというと、それは彼らの仕えている主人を喜ばせるためです。私たち人間は例外なく神かサタン、どちらかの主人に仕えているのです。人間が作り出したこの世のすべての宗教はサタンを喜ばせるものです。まことの神を喜ばせるものにはありません。イエス様がヨハネの福音書の中で、イエス様を信じたと自称している者たちに対して大変厳しいことを言われました、ヨハネ8：44「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っている」と。あなたたちが望んでいること、あなたたちが求めていることはあなたたちの父であるサタンの欲望を成し遂げることだけだと。つまりこの人たちがやろうとしていたことはサタンを喜ばせることだと。道理でこの偽りの教師たちが教会に入り込んで来た時に、神の道から人々を遠ざけていかうとする理由がわかります。彼らの仕えている主人が神ではなからず。

この18節に「終わりの時には、自分の不敬虔な欲望のままにふるまう」と、「ふるまう」という動詞が出ています。これは現在形が使われています。このように彼らが継続して習慣的に歩み続けていたことを教えています。教会の中に入り込んで来てこういう生き方を大っぴらにしていたら人々は惑わされることは余りありません。なぜこういう人々が人々を惑わしたのかというと、彼らは見たところはいかにも霊的だったからです。彼らは聖書のことをよく知っているから人々は惑わされてしまうのです。この人たちは聖書のことをよく知っていながら聖書の言葉を信じていないのです。こういう連中が教会の中に

入り込んでくるのです。そして彼らは今あるように、「自分の不敬虔な欲望のままに」継続して歩み続けています。この人たちの大きな問題は、こういう歩みをしていながら、それが神に喜ばれていると考えていたことです。自分たちのやっている生き方こそが神の前に正しく、神に喜ばれるのだと人々に語り続けていたのです。彼らのメッセージは神のみことばに従わなくても、このように欲望に従って生きる生き方も神はよしとされるのだと教えているのです。こんな教えは新しい教えではありません。どこにもあるのです。

パウロはローマ1-3章で簡単に言えば人間の罪深さを教えています。4章からは、ではどうやってそのような罪人が救いにあずかるのかという救いの話になります。4章でパウロが最初に言ったことは、アブラハムはどうやって救われたのか、彼の救いの話をします。彼は信仰によって救われたということで、信仰こそが救いにあずかる道だと教えていくのです。そしてこんな罪深い私たちを神様は救ってくださった、その救いのみわざによって神の栄光が現されると。そうすると、ある人はこう思うのです。では、神の栄光が罪の赦しによって現されるのだったら、我々はもっと罪を犯したらどうだと。罪を犯したら神は赦してくださる。そして栄光が現れるのなら我々はもっと罪を犯すべきではないかと6章の初めに出てきます。そしてそれに対してパウロはそんなことが決してあってはならないと言うのです。なぜかという、確かに人間的に言えば、罪を犯して神の栄光を現されるのだったら、これはいい生き方だと思うかもしれない。でもそういう生き方を私たちができないのはどうしてかという、私たちは新しく生まれ変わったからです。私たちのうちには新しい心が与えられて、そして私たちの新しい心は神に喜ばれるように生きて行きたいと、そのように働くからです。ですから信仰者が罪を犯さないわけではないのです。悲しいことに私たちの中にはまだ罪を愛する気持ちがあり、神のみこころがこれだとわかっていながらそれと違うことを選択するような弱さがあります。でも我々が神に逆らった時に、内住する聖霊は私たちに、それは間違っている、正しくないと教えてくれるのです。そうして私たちを正しい方向に導いていこうとされます。それはイエス様を知らない時には起こらなかったことです。イエス様を信じることによって私たちはそのように新しく生まれ変わって、義とされた者として神の前に喜ばれることを行っていきたい、そういう願いを持って生きる人へと変わったのです。だから私たちがいつまでも罪の中にとどまり続けることはできないのだとみことばが教えています。先ほどのローマ1章に出てきたように、罪を犯すことによってそれを神が赦してくださることによって、神の栄光が現されるのだったら、もっと罪を犯せばという議論は私たちの中に存在しないのです。悲しい現実には罪を犯しているのです。でも我々の心の中には、罪から離れたい、少しでも神様を喜ばせていきたい、神様のすばらしさをいつもたたえていたい、そういう神を喜ばせるという思いがあるからです。

(3) 主を畏れない者

この教会の中に入り込んで来たにせ教師「あざける者」たちの教えていたことは、罪を犯し続けても大丈夫、それでも神は喜んでくださるからと。彼らの問題は一体どこにあったのかという、ユダ15節に要約されています。「すべての者にさばきを行ない、不敬虔な者たちの、神を恐れずに犯した行為のいっさいと、また神を恐れない罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて、彼らを罪に定めるためである。」、この人たちの問題は、主に対する畏れがないことです。何をしても構わない、この人生好きに楽しめばそれでいいと。神に対する畏れがないのです。こうして彼らは自分たちの思いのままに生活を送っていると。神のみことばに従って生きるのではなくて、自分たちの快樂に従って生きていこうとする。神を喜ばせることよりも自分を喜ばせることを目的に生きている。それは彼ら自身の中心が神ではなくて自分自身だからです。なぜ彼らがこんな生き方をするのか、その理由まで書いてくれています。

◎ 彼らがなぜそのような生き方をするのか

その理由は、彼らが救われていないからだユダは19節で教えます。「この人たちは、御霊を持たず、分裂を起こし、生まれつきのままの人間です。」と。日本語訳はこうなっていますが、原語では、「分裂を起こし」、「生まれつきのままの人間」、そして「御霊を持たず」という順番に並んでいます。ユダがそのように記したのです。その順番にならって見ていきましょう。

① 分裂を起こす者

最初は「分裂を起こし」ということばです、これは分裂を作り出す原因となるということです。教会の中にあって人々が背を向けたり、人々が話をしなくなったりとか、人々が互いに怒り合うとかこのにせ教師たちはそういう原因を作り出しているのです。なぜこんなことがなされたのかという、その問題は彼らのプライドです。彼らは自分たちがほかの人に比べて優れていると信じていました。彼らはたくさん真理を知っていて、そうでない人々をさばいて批判するのです。ちょうどパリサイ人や律法学者たちと同じです。

a. 人からの賞賛を求める者

イエス様が彼らの問題点を指摘しました。なぜパリサイ人や律法学者が間違っているのか。その一つ

は彼らは神からではなくて人からの賞賛だけを求めていたからです。神様に褒められたいではないのです。人々から褒められたいと人の目ばかりを意識していた。ルカ16：13-14にイエス様が「しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、または一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません」という話をされた時に、「金の好きなパリサイ人たちが」そこにいて、「一部始終を聞いて、イエスをあざ笑っていた。」と書いてあります。15節にイエス様は彼らに対してこう言うのです。「あなたがたは、人の前で自分を正しいとする者です。しかし神は、あなたがたの心をご存じです。人間の間であがめられる者は、神の前で憎まれ、きらわれます。」と。何を指摘されたのかというと、このパリサイ人やほかの宗教家たちに共通していたのは、彼らは人間からの賞賛だけを求めていたのです。人から褒められることしか考えていない。ですから人の目につくこと、人が驚くようなこと、人が褒めるようなことを彼らは追い求めているのです。空しい人生ですよ。

私たちも救われる前はそうでした。救いにあずかってからはそういう世的な、人間的なことはどうでもよくなった。私たちがしっかり覚えるべきことはいつか私たちは主の前に立つのです。その時に問われることが一体何であるかをしっかり覚えて、きょうを生きないといけません。神の命令に忠実であったかどうかです。主のみことばに忠実に従ってきたかどうかです。それ以外のことは問われない。どんな働きをしたのかはどうでもいい話です。それは神の恵みによってなしてきたことです。神様の言われていることに忠実に従ってきたかどうか——。もっと言い方を変えれば我々は日々の生活において信仰者として成長しているかどうか、イエス様に似た者に変えられているのかどうか、それが問われることです。もちろん主は問わなくても私たちのことをすべてご存じです。この人たちはそうではなかった。人からの賞賛だけを求めていたのです。

b. 人の教える真理に従う者

同時にこの人たちの問題点というのは、神の真理ではなくて人の教える真理に従っていたのです。神様の教えに従ったのではない。彼らは人間の教えに従っていたのです。それが彼らの問題点でした。パリサイ人と律法学者たちがエルサレムから来ていて、イエスの周りに集まっていました。これはマルコ7：1に出てくる話です。するとイエス様の弟子の中で「汚れた手で、すなわち洗わない手でパンを食べている者が」いたので、彼らはイエスに文句を言うのです。昔の教えに従えばそういうことをしてはいけないと書いてあるではないですか。なぜあなたの弟子はそういうことをするのかと、要約すればそういうことです。そうしてイエスを責める宗教家たちに対してイエス様が言われたことは「イザヤはあなたがた偽善者について預言をして、こう書いているが、まさにそのとおりです。『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。あなたがたは、神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っている。』」と。マルコ7：6-8です。この教会の中に入り込んできた偽りの教師たち、神の真理をあざける者たちは自分たちがいろいろな知識を持っているからと言って、教会のリーダーたちを非難し批判するのです。勘違いしないでください。みことばに反しているのなら責められなければいけない。でもみことばが私たちに教えてくれているのは、この教会の中に入り込んで来た、偽りの教師たちがしようとしたことは明らかにこの教会が神の真理から外れてしまうように、その意図をもって誘惑するのです。だから私たちが注意しなければいけないのは、本当に語られている内容が聖書に基づいたものかどうかです。繰り返しますが、あなたはしっかりと霊的な判断力を身につけなければいけないと。

彼らはこういった間違った教えを持ち込んで、教会の中にいろいろな分裂をもたらそうとしています。今の私たちにとって大変気をつけなければいけないのは、神はあなたや私に何を命じておられるのか、なぜ分裂が起こるのかということ、結局はみことばの教えに従わないからです。ピリピ2章でパウロが教えていることは、みんなが一致を保つようにということです。その秘訣としてこう言っています。

「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」（ピリピ2：3）と。みんなより私がすぐれていると思いたい私たち、もし我々がそんなふうにしたのなら、そこには一致など生まれてきません。分裂や分派がいつぱい出てきます。みことばが教えているのは、イエス様がそうであったように、その経済状態や教育、仕事など一切関係なく、あなたの周りのすべての人があなたより優れた者と思って神に仕えていきなさいと。これがみことばが教えていることです。これが神のみこころなのです。分裂を作り出す人なのか、それとも一致を作る人なのか——。人々の成長のために仕えているのか、それとも人々を批判してさばいているのか——。この偽りの教師たちは分裂を起こしていた。

② 生まれつきのままの人間

次に「生まれつきのままの人間です」とあります。この「生まれつきのまま」というのは、大変おもしろいギリシャ語です。「プシュキコイ」と言います。なぜあえてギリシャ語を皆さんに伝えるかという

と、非常におもしろいことがなされているからです。「生まれつきのまま」というのは世的な考えを持っている人です。生まれながらの欲望に対して自制心もなく、制御も全くできずにただその欲のままに生きている人のことです。欲しい物を欲しがって、好きなように生きている。自分が楽しいように生きている世的な人です。霊的な人と全く相反する人です。ユダはこの教会の中に入り込んで来たにせ教師たち、自分たちのことを誇り高ぶっているこの人たちに対してあなたたちは「プシュキコイ」だと、世的だと責めるのです。なぜこんなことを言ったかという、このにせ教師たちは自分たち以外の人々を「プシュキコイ」と呼んで批判し、さばいて見下していたのです。あなたたちはみんな世的で、私たちだけが霊的なのだと。そこでユダはとんでもない、実はあなたたちが「プシュキコイ」、世的なのだと言ったのです。

これだけ聞いたら何だろうと思われるかもしれませんが。実はこういったことがあったのだというのをバークレーが非常にうまく説明してくれています。ギリシャ人には二つの階級が存在した。一方は今出てきた「プシュキコイ」です。この人たちは肉に属する人々、世的な人です。もう一方は「プニマキコイ」と言い、この人たちは真の知識を持っている人たち、神を真に知っている人たちです。ギリシャ人はこうして二つの階級に分けていたのです。さて、このにせ教師たちは自分たちは「プニマキコイ」だと信じ切っていました。彼らは、一般人の行為を律する普通の律法は自分たちには適応されれないと言うのです。普通の人々、大衆は道徳律や基準を守らなければならないかもしれないが、自分たちはそれを超越していて、自分たちには罪は存在しないのだと。自分たちは高等な人間なので何をしても墮落しないと信じていたのです。こういった考えが背景にあったと言うのです。だから彼らは自分たち以外の人を見下し、さばいていたのです。そこでユダはあなたたちは大きな間違いをしていると。実際に「プシュキコイ」、この世に属する者はあなたたちなのだ、19節で彼らのことを呼んだのです。

③ 御霊をもたない者

最後に出てくるのは「御霊を持たず」です。なぜこんな厳しいことをユダが言ったのかという、すべてはここに出ています。彼らは「御霊」、つまり聖霊なる神が彼らのうちには内住していないと言ったのです。聖霊なる神様がうちに住んでいない人は、救いにあずかっていません。だから彼らは「プシュキコイ」なのです。自分たちこそが霊的な者であって、教会の中のすべての人たちよりも我々こそが霊的で、私たちが最も優れた者だとどんなに言い張っていても、彼らのうちには聖霊なる神はいないのです。だから先ほども見て来たように、このような生き方を継続して行うことができるのです。あなたたちには聖霊がない、あなたたちは救いにあずかっていないと。

こういった偽りの教師が入り込んで来た時に、どうやって自分自身をそういう教えから守っていくのか——。3節のところに戦い続けていきなさいと出てきました。どうしたらいいのか——。17節、きょう我々が見て来たように、「私たちの主イエス・キリストの使徒たちが、前もって語ったことばを思い起こしてください。」と。使徒たちが語った神の真理、神のおことば、これにしっかりと立ち続けていきなさいと。今、我々には神が記された神のおことば、神の完全な啓示が与えられています。この中に神の真理が記されています。このみことばに立ちなさい。それがユダが教えることです。

今回、いろいろな牧師と話をしている、有名な神学校を卒業した者が全く異なった教え——異端へと走ってしまったケースを何回も聞きました。なぜ？と思うような話です。また有名な神学校自体が世代の交代が進むにつれて、かつての聖書に基づいた教えではなくて聖書の教えに反することを教えるようになってしまったケースを耳にします。我々人間というのは、偉い人が語っているから、著名な人が語っているからと、だれが語っているかによって誘惑されてしまいます。私たちは誰が語っているか、誰が教えているかではなくて、何を教えているのか、何から教えているのかを祈りをもって吟味することが必要です。その教え自体は神の真理に立った教えなのかどうか、そのことをしっかりと吟味しなければいけない。なぜならば神の真理に立ち続けることこそがあなたを偽りの教えから守る一番の方法だからです。信仰者の皆さん、私たちには神様のおことばが与えられています。みことばのメッセージを聞いたり、みことばを使って人々が話す時に、本当にそれが聖書が教えていることなのか、吟味することです。その霊的判断力を養っていくことが必要なのです。そのためにはしっかりとみことばを見て、そしてそのみことばの真理から外れないこと。どうかそのようにして歩んでください。それが主が私たちにまず求めておられることです。次回私たちが集まる時にその続きのメッセージを見ていきます。どのように私たちが歩むことによっていろいろな誤った教えに惑わされることなく勝利できるのか——。